英国自然埋葬地における「場所」の図式化

Schematization of “Places” in the Natural Burial Grounds in the U.K.

武田 史朗^{*}、増田 昇^{**}

Shiro TAKEDA Noboru MASUDA

Abstract : The importance of “places” has been recognized in the field of environmental design, but the methods to plan and design, or to analyze the “places” have not been established in the field of landscape design. Therefore in this paper, it is aimed that the method to schematize the “places” be proposed and be applied to the landscape design precedence of the natural burial ground (NBG) in the U.K. First, the idea of “place” is made clear based on the texts by Y. F. Tuan and E. Relph. Second, the method to schematize “places” is proposed based on the idea of “place memory”, which was originally proposed by E.S.Casey. According to this idea, memory is sustained mainly by “place”, which is then sustained by “landscape” that includes “horizons”, “pathways”, and “things”. Third, the proposed method is applied for the analysis of the NBG precedence. And fourth, the validity of the method is evaluated by how well the resulting scheme can explain the characteristics of the project. The resulting scheme successfully explained the main characteristics of the projects, and the method proved acceptable. It is also found that in analyzing “places”, to clarify the meaning of the landscape elements that may be given not by the physical design but by the program is important.

Keywords: *Sense of Place, Schematization of place, Place memory, Natural burial grounds, Cemetery design*

キーワード: 場所性, 場所の図式化, 場所的記憶, 自然埋葬地, 墓地計画

1. 研究の背景と目的

環境デザインにおける「場所」という概念の重要性は、人文地理学者である E.レルフ¹⁾や Y.F.トゥアン²⁾などの指摘以来、長く認められている。工業化社会における急速な都市開発がつくりだした歴史性や住民の愛着に欠けた景観の特徴をレルフが「没場所性」と表現した³⁾ことなどから、地域デザイン、景観保全などの議論では特によく参照される概念となっている。しかし「場所」は、既に意味の与えられた景観の中に保全されるだけではなく、新たに計画される空間においても創出されてゆくべきであり、そのためには利用者が意味を与え得るようなデザインの方法論が必要と考える。では「場所」は如何にして創出されるのかという点については、レルフによればある空間が特定の主体の「意思が向かう対象」となって「直接経験」されることで、そこに「生きられた空間としての意味」が与えられ、その結果として「空間が周囲の空間の一部でありながらもそこから分離して」感じられるとき、それが「場所」となるとされる⁴⁾。このような直接的経験という出来事の個人的な性格や、「意思」というものの主観的な性格が具体的な空間デザインの「場所」論を困難にしてきたといえるだろう。すなわち、デザインにおける「場所」論のためには、直接的な経験と物理的な空間の設定との関係を橋渡しする概念が必要とされる。

本稿では比較的小規模なランドスケープ・デザインの方法論に関心を持つ立場から、この空間と経験とを橋渡しする概念を導入し、それを用いて空間デザインの具体的なケースに即した「場所」論を試みる。具体的には、哲学者 E.ケイシーの提唱する「場所的記憶 place memory」⁵⁾という概念に基づいた「場所」の図式化方法を提案し、それを具体的な自然埋葬地 Natural Burial Ground (以下 NBG) の計画事例に適用して「場所」の図式化を行い、結果を考察することで計画の特性が記述できているかどうかを検証する。そして、この作業結果を空間デザインのレベルでの「場所」論の一つの手掛かりとしたいと考える。

2. 研究の対象と研究の位置付け

本稿では、「場所」に関する論考の対象として英国の NBG のうち、Wrabness に所在する Oakfield Wood を取り上げる。NBG については武田、増田による一連の研究^{6)~8)}があり、Oakfield Wood は武田・増田 (2006) で「景観的枠組」について論じられている事例のうちの一つである。この事例を改めて取り上げる理由は、前掲論文が平面的、断面的な模式図上に視覚的な「景観的枠組」を示すにとどまり、本稿で目的とするような「場所」自体の図式を描くには到っていないということの他に、以下の2点がある。

第一点は、自然的な景観を背景として文化的活動が行われる場所の方が、人為的な空間設定の意図が読み取りやすいと考えたためである。Oakfield Wood は、もともと農場だった敷地を生垣で囲い込み、遺骸を一体埋葬する毎に一本の記念樹を植えることで長期的に樹林を形成するという計画である。さらに、将来的に自然保護地化が予定されているという事情から、敷地内では人工物の使用を極力避けつつ計画、運営されている。このため、敷地においてこの活動のために成された人為的操作が一目瞭然である。第二点は、NBG が高度に精神的ながらも明確な利用計画をもつ計画地であるためである。生きられた場所の計画論に際しては、目的性が明らかでない敷地を対象に多数の利用者の意識調査を行って共有される意味を心理量として特定する方法と、特定の利用計画をもつ計画地を対象を絞ることで、利用者や分析者個人の私的な思い入れが影響する範囲をあらかじめ限定しておく方法とが考えられる。前者の方法で行われた既往研究としては、ネパールの広場を対象に指摘法を用いて調査を行い多様な目的をもつ公共空間における景観要素を特定しその意味を問うたプロダン、積田らによる研究^{9), 10)}がある。これに対して本稿では特定の精神的な要求に応えることを目的とした空間デザインの手法に関心を抱く立場から後者の方法をとる。葬送と自然回帰という明快で精神的な目的を持つ NBG の計画事例が、この方法による研究の対象としてふさわしいと考える。

^{*}立命館大学大学院理工学研究科 ^{**}大阪府立大学大学院生命環境科学研究科

3. 図式化の方法

(1) 「場所」の成立条件

本節では、武田・増田（2006）でも参照されている E.ケイシーの「場所的記憶」という概念に基づいて「場所」の図式化の方法を検討する。ケイシーは、人間の想起行為は時間よりも場所によってより強く支えられるものであるとして、このことを「場所的記憶」と表現している。一方、「最初はまだ不分明な空間は、われわれがそれをもっとよく知り、それに価値を与えていくにつれて次第に場所になっていく。」¹¹⁾ というトゥアンの言葉にあるように、空間は人間の記憶に刻まれて初めて「場所」として認識されると考えられることから、ここには「場所」と記憶の相補的關係が伺われる。そこで、本稿では「場所的記憶」の成立条件を「場所」の成立条件と等しいものと見なすこととする。

またケイシーは、この「場所的記憶」が成立するにあたっては「ランドスケープ landscape」が重要であり、それは以下の三つの要素によって構成されるとしている¹²⁾。すなわち、景観の視覚的境界をかたちづくるものとしての「地平線 horizon」（観察者を中心に比較的狭い領域を規定する「内的地平線 internal horizon」、広い領域を規定する「外的地平線 external horizon」とを含むとされている）、観察者の位置およびその移動を導入する「経路 pathway」、さらに景観中に自立した存在として認識できる「物 thing」である。ケイシーは、それらの関係を次のように表現している。「地平線と経路が、それぞれ外側と内側から場所の範囲を定める一輪郭と構造を与える」とするなら、物は場所の形に内実をあたえ、充満させる。¹³⁾ この説明を本稿では「地平線」と「経路」とが観察者に空間知覚の枠組（ケイシーのいう「輪郭と構造」、または「形」）を提供し、「物」は観察者が想起行為を通じて空間に意味（ケイシーのいう「内実」）を与えるための想起媒体であると理解し、上記の3つの「ランドスケープ」の構成要素が揃った状態

図-1 「場所」, 「ランドスケープ」と意味の関係の図式

が成立するも

のと考える

(図-1)。

(2) 「ランドスケープ」要素の再定義

「地平線」、「経路」、「物」の抽出基準は、原則として武田・増田(2006)に倣うが、一部を修正して以下のようにする。

「地平線」：空間の視覚的広がりを限定する境界線。観察主体の位置によって大きく変化するものと、主体が移動してもある範囲内なら変化しない領域を設定するものの二種類とも抽出する。

「経路」：線的な平面形態を持ち、その上を辿って人が移動するもの、および、固定した形態を持たないが、全体の計画趣旨から墓参や埋葬の儀式上必要な経路として認められるもの。

「物」：立体的または平面的に自立した輪郭を持ち、主体の位置から見たときに視野全体の中で前景として認識できる要素。ただし、「物」が場所の内実すなわち意味を受け持つとするならば、「物」として抽出されるためには、上記の条件を満たしたうえで利用計画、何らかの想起媒体としての役割を持つ必要がある。

(3) 「ランドスケープ」要素相互の重層的な関係

上記の「ランドスケープ」要素は、実際には相互に複雑な関係を持つことが日常の経験から推察できる。そこでこれを要素間の重層的関係として以下で検討する。

まず、「地平線」は開口部によって「縁取られた景観」をつくり出すことが挙げられる。この重要性は、「場所」のもつ特性を建築的な比喩を用いて「ルーム」と表現し、その満たすべき条件に開口部の存在を挙げる香山の指摘¹⁴⁾によっても補強される。また、窓によって縁取られた景色がその「場所」の焦点となるのはごく一般的な経験なので、本稿ではこの縁取られた景色も「物」として抽出の対象とする。その反対に、内部に「地平線」をつくる建物が、外部から見ればそれ自体「物」としての意味を持つ場合も考えられる。

以上のような「物」と「地平線」の重層性の具体例としては、武田・増田(2006)で取り上げている Colneywood Park の礼拝堂と周囲の樹林が上げられる(図-2、図-3)。これと同じことが遠目に「物」と見られ得るような一塊の樹林と、その内部につくられる「地平線」の関係についてもいえ、本稿で取り上げる Oakfield Wood で出入口となる生垣の途切れ目から見る埋葬地の景色も、縁取られた景色の例である。

次に、「物」となりうる単体の物体が集団となり全体が一つの「物」として認識される場合のような、「物」相互の入れ子状の関係が考えられる。具体的には Oakfield Wood において、墓参者にとっては個別の「物」である記念樹が、集合して鎮魂の森という象徴的な「物」の姿を得る場合を挙げることが出来る(図-4、図-5)。

(4) 「ランドスケープ」による「場所」の図式化

「経路」、「地平線」、「物」の空間的な関係は、＜観察者は「地平線」に囲われた領域の中で「経路」上に位置しながら、「物」を認識している。＞と表現できる。ある計画に関してこうした「場所」の単位が複数接続することで互に移行可能になっている様子を図化すれば、平面、断面の領域分けや、複数の固定された観察位置からのシーケンシャルな景観分析では得られない、その計画における「場所」相互の関係を描けるものと考えられる。

「地平線」は純粋に視覚的に決定されるから、観察者の主観による変化が少なく、3つの要素のうち最も安定した要素である。したがって場所間の移行を記述する際に、「地平線」間の移行を

図-2 樹林中に「物」として際立つ礼拝堂 (Colneywood Park)

図-3 礼拝堂の開口部に縁取られ「物」として見える樹林。出入口に描かれた円形の柄によって、樹林を視覚的に対象化しようとする意思が強調されている。(Colneywood Park)

図-4 鎮魂の森として「物」の輪郭を持つ樹林 (Oakfield Wood)

図-5 墓参者にとって「物」と見られる樹林中の樹木 (Oakfield Wood)

軸として記述することが妥当と考える。

次に「経路」については武田・増田(2006)の知見より、「経路」がランドスケープの枠組に与える影響は、道幅や素材の変化そのものよりも、その結果生じる「経路」としての集団にとっての共有認識のし易さによるものの方が大きい。本稿では、「経路」が明確な形態を持ち、集団に共有して認識されやすい場合その「経路」は安定で、そうで無い場合は不安定と表現する。また「経路」の安定/不安定の変化は「地平線」の変化とは独立して起こりうるので、「経路」の安定/不安定の境界線は「地平線」の境界とは別に描く必要がある。

図-6 「場所」Aの図式

図-7 車廻しにある独立木は、「経路」が明確になるため、かつ遠景の「地平線」に囲まれた埋葬地において、その中心を示すと同時に自然を象徴することで「物」としての役割を果たしている。(Oakfield Wood)

また、「物」はケイシーによれば「場所」の中心だが、必ずしも物理的な空間の中心とは限らないと考える。むしろ異なる「地平線」内の観察者がそれぞれの「場所」を経験する際に遠景の塔を「物」として共有していたり、同じ「地平線」内からでも見る向きによって複数の「物」が観察されたりする場合も考えられる。そうした場合でも一律に図式化できるよう、緑取られた景色などの場合以外は、原則として「物」は「地平線」枠の外部に描くこととする。以上は範例的な図式として図-6のように描くことができる。

この図において「場所」は地平線に囲まれた領域に対応するのではなく、＜観察者は「地平線」aに囲われた領域の中で安定した「経路」上に位置しながら、「物」αを認識している＞というひとつの状況として「場所」Aを表現するものとする。図式との対応関係が分かりやすい例として、図-7にOakfield Woodの埋葬地の写真を示す。

図-8 相互に移行可能な「場所」AとB

図-9 「物」と「地平線」の重層的関係

図-10 「物」の入れ子状の関係

なお、前述した「物」と「地平線」との重層的な関係に関しては、ある「地平線」に隣接する別の「地平線」内の「物」の枠や、「物」の枠の内

側にある「地平線」の枠で表現することとし、範例的には図-9のように描くこととする。図-9では「地平線」aから「地平線」bの景色の一部が切り取られた「物」αを見る状況が一つの「場所」をつくり、「地平線」bから「物」βを見る状況がもう一つの「場所」をつくらせている。先のColneywoodの例でいえば、樹林（「地平線」b）の中に礼拝堂（「物」β）があり、樹林から出入りが可能な礼拝堂の中からは大窓を通して樹林が切り取られた景色（「物」α）として見えていることになる。最後に「物」相互の入れ子状の関係については、複数の「物」がつくる「地平線」内の観察者がその地平線をかたちづくる単数の「物」を認識していると理解し、図-10のように表現する。以上の議論では「場所」の図式化としつつも「ランドスケープ」要素のみを扱ってきた。これを「場所」の図式と見なすためには、図式に描かれている「物」に対して与えられる意味（ケイシーのいう「内実」）が、利用計画や機能的関係から明らかであることが前提となる。したがって、「場所」の図式とは、上記の「ランドスケープ」要素の図に加えて、各「物」に見出される意味合いが何らかの形で明示されたものであると考える。

4. 景観要素の抽出結果

「経路」の抽出結果の記録方法は、武田・増田(2006)にほぼ倣い、物理的形態をもつ経路を矢印付き実線で表し、形態をもたない経路については訪問者が目的地へいたる経路をどのように選び得るかが想像できるよう、可能な経路の例を矢印付き点線で表示する。一方、「地平線」に関しては、同論文では内的、外的という重層的な性格を正確に示すために断面模式図上に範例的に示していたのに対し、本稿では「地平線」の重層的な性格を表現することよりも「場所」間の隣接関係の感覚的な把握を優先し、「経路」と併せて平面模式図上に描くこととした。したがって観察される位置を明確にするため、主には「内的地平線」が代表する形で記されている。ただし、H-6のように無数にあり得る小規模な「内的地平線」には括弧書きで「例」と記す。図-11にOakfield Woodでの抽出結果を示す。なお、「地平線」は記号Hと番号で記す。

図-11 Oakfield Woodの「地平線」と「経路」

「物」については、前節までの議論から、「物」の利用計画上の意味を明確にすること、また最終的な図式化にあたってはその「物」が観察される「地平線」を明記することが重要と考え、それらの情報を表-1に示す。NBGの一般的な計画論として利用者の個人的な思い入れによる「物」への意味づけの混同を避けるために、各「物」は、NBGが一般に共有する「葬送」という機能と、「自然回帰」という考え方を中心として利用計画に位置づけられる場合のみ取り上げ、記号Tと番号で表記する。なおT-5に関しては個別に観察された物体が、合わさることで自然に同化する墓標としての意味を持つ「物」として機能すると判断し一つにまとめた。

表－１ Oakfield Wood の「物」の抽出結果

記号	観察できる「地平線」	物体	写真	プログラム上の意味
T-1	H-1, H-5	樹林全体		生育するにつれて、農場的な風景の中で際立った樹林の存在感が増し、敷地全体に視覚的な輪郭を与える。
T-2	H-2	ワイルド・ライフ・トラストの標識		敷地が自然保護地となることの保証であり、これより先が自然の空間と見なされることを示唆する。
T-3	H-4	生垣に縁取られた埋葬地		出入り口である生垣の途切れ目から、目的地、終着地点としての自然の風景を見ている。
T-4	H-5	車廻しの樹木		中心性のある人間的な空間でありながら自然物で示すことで自然を主題としていることを示唆する。
T-5	H-6	盛土		やがて沈下するが、存続する間地下の埋葬を暗示する。草に覆われた表面が地面との一体感を醸成させる。
		名板		故人の名前と生没期間によって社会的な属性を表示する。やがて腐朽し、自然の循環への回帰を暗示。
		樹木保護筒		埋葬箇所の初期の標柱。幼木の保護筒のもつ人工的な形状が、自然物よみ人工的な墓碑の様相を呈する。
T-6	H-6, H-7	記念樹		一本に一本の記念樹は時と共に樹林と一体化する。社会的個人が自然の全体性へ回帰する様を示唆する。

5. 図式化の結果と考察

図－12 は、4 節で抽出した景観要素を 3 節で検討した方法に従って図式化した結果であり、4 節に整理した「物」の意味と合わせて Oakfield Wood の「場所」相互の関係性を示している。

この図式から、複数の「物」が観察される H-5 においては敷地の中心を示す独立木 T-4 が安定した「経路」をもつ領域から観察され集団に共有され易いのに対し、個々の埋葬と対応する記念樹 T-5 は「経路」が不安定な「ランドスケープ」において観察されること、一塊の樹林の一部である成長した記念樹 T-6 が墓参者一般にとっての終着点であること、といったことから、全体のシーケンスにおいて「ランドスケープ」は徐々に集団的なものから個人的なものへと移り変わっていることがわかる。以上から、場所の展開に関して平面模式図からよりも構造的な読み取りが可能となっていることがわかる。

なお、2 節で述べたように、本稿では追悼という特定の利用計画をもつ計画地を対象を絞ることで、利用者や分析者個人の私的な思い入れの影響する範囲をあらかじめ限定しておく方法をとった。したがって、たとえ全体のシーケンスの中で印象的となり得る場面であっても、追悼行為に関連して何らかの想起媒体となる「物」がなければ「場所」に意味が与えられているとしなかった。この結果 H-3 は「場所」と見なされないが、この H-3 が通路であることは、「運動を可能にするものとして空間を考えるとすれば、場所は休止ということになる¹⁵というトゥアンの考え方にも符合するものであり、「場所」に関する一般的な議論に適

合する範囲で結果が得られたものとする。

一方で、H-3 のように本稿の基準で「場所」とは見なせないものに関しても、「間」や「閥」など、展開全体の中での位置付けを行ってゆくことで、シーケンシャルな空間体験の中で初めて付与される空間の意味に関する議論を、今後発展させる可能性があるものとする。

また本事例の特徴である樹林の成長に伴う変化に目を向ければ、図-12 の点線で示すように H-6 および T-1 を拡張することで樹林の拡大による「場所」の変化をスケッチ的に描くことも可能である。このような記述法は、分析時だけでなく、長期計画を伴うランドスケープの設計の段階でも利用価値をもつと考える。

図－12 Oakfield Wood の「場所」の相互関係

以上の考察からランドスケープの「場所」相互の関係性を図式化する一方法を試案として提示し得たものとする。ただし本稿では 2 節に述べた理由と分析方法の検討を詳細に論じる必要とから対象を 1 事例に絞った。図式化方法の信頼性を高めるには今後より多くの事例で試すことや、単一の事例について複数の分析者による図式化を行うなど、有効性の検証と改善が必要と認識する。なお、本稿の図式化方法はケイシーによる「場所的記憶」と「ランドスケープ」の関係が、レルフのいう直接的な経験と物質的な空間との関係に符合するという仮説に立っている。したがって本稿の図式化方法が有効とすればこの仮説も妥当と考えられるので、「記憶」を切り口にすることで、生きられたランドスケープに関するより客観的な議論を行い得る可能性があるものとする。

補注及び引用文献

- 1) エドワード・レルフ(1999): 場所の現象学: 筑摩書房
- 2) イーフ・トゥアン(1993): 空間の経験: 筑摩書房
- 3) 前掲書 1, 187pp
- 4) 同上書, 80pp
- 5) Casey, Edward S. (2000): Remembering A Phenomenological Study: Indiana University Press, 181-215
- 6) 武田史朗 (2005): 英国における自然葬地運動とその制度的枠組の発生および発展プロセス: ランドスケープ研究 68(5), 809-812
- 7) 武田史朗・増田昇 (2005): 計画許可申請に対する計画小委員会報告書の分析を通じた英国の自然葬地の景観的価値に関する研究: 都市計画論文集 40-3, 805-810
- 8) 武田史朗・増田昇 (2006): 英国の自然葬地における景観的枠組の分析: ランドスケープ研究 69(5), 419-424
- 9) プロダン スラズ・栗生明・積田洋・鈴木弘樹 (2005): 指摘法による広場の空間構成要素の分析: 日本建築学会計画系論文集 589, 63-70
- 10) プロダン スラズ・積田洋・鈴木弘樹・栗生明 (2006): 空間意識と構成エレメントの特性によるネパールの広場の分析: 日本建築学会計画系論文集 607, 57-63
- 11) 前掲書 2, 17pp.
- 12) 前掲書 5, 203-206
- 13) 同上書, 205pp
- 14) 香山壽夫 (1996): 建築意匠講義: 東京大学出版会, 132pp.
- 15) 前掲書 2, 17pp